数時間で逮捕した。ヒトラーの軍は、折しもポーランドに進撃を開始していた。ジャボティンスキーが、まさに起こりようもないとしたその戦争をヒトラーは始めたのであった。[28]

第12章　ゲオルク・カーレスキ――クヴィスリング以前の、シオニストの中のヒトラー「クヴィスリング」

ジャボティンスキーがヒトラーに反対し、アッバ・アキメイルを説得してヒトラーに対する賛美をやめさせることができたということは、改訂派すべてが親ヒトラーの立場を捨てたということを必ずしも意味しなかった。改訂派の中には、対独協力の道がシオニズムを前進させるとなお確信していた者もいた。こういった人びとの中でも最も悪名高かったのはゲオルク・カーレスキで、すでに見てきたように一九三三年、ジャボティンスキーはカーレスキの動きをおさえようとした。

カーレスキ（一八七八年生まれ）は、一九一九／二〇年には、すでにドイツ・シオニスト連合がパレスティナに向けた活動にしか目がいかなくなっているのを無視する一方、ユダヤ教信徒共同体の政治に関心を集中させていた。多くのドイツ・ユダヤ人が異宗婚や無神論を選んだ信仰衰微の時代に、宗派心の強いユダヤ教信徒共同体に執着する人びとはさらに内向的にさえなっていった。一九二六年に、他の宗教的孤立主義者と同盟を結んだカーレスキのような内向的シオニスト、ユダヤ国民党は、「リベラル」なドイツ国民主義に立つ改革派指導部を混乱に追い込むことに成功し、一九二九年一月には、カーレスキがベルリン・ユダヤ教信徒共同体の議長になった。しかし彼の成功もつかの間で、一九三〇年にはリベラルがカー

レスキを打ち負かした。一九三〇年九月の国会選挙ではカーレスキはカトリック中央党の候補として立ってドイツ政界に入った。中央党はその宗教教育への関心と社会的保守主義ゆえにカーレスキにとっては魅力ある政党と映ったのであった。ヒトラーが政権に就くと、カーレスキは今度は改訂派に加わった。今や成功したナチスに見合っており、ユダヤ人の中でも可能性をもった組織とみなしえたからである。改訂派は、ドイツ・シオニスト連合内部でも微々たる分派であったし、一九三一年の世界シオニスト会議の代議員選挙でも八四九四票中一一八九票しか獲得できなかった。一九三三年には、対立する閥に分裂することによってさらに取るに足りない存在になっていた。共同体で名の知られたメンバーとして威信を有したカーレスキは、このぱっとしないドイツ改訂派勢力のリーダーにたちまちおさまり、難なく新組織「国家シオニスト機構」に合体した。

一九三三年五月にはベルリン・ユダヤ教信徒共同体センターで滑稽な「一揆」を企て、ドイツ・シオニスト連合から追い出された。プラハ会議での反ナチ・ボイコット敗北に続く、世界シオニスト機構からの改訂派の脱退の後もカーレスキ自身の躍進は止まず、ナチスとの提携もさらに進んだ。改訂派が事実上もはや世界シオニスト機構の構成部分ではなくなった時、ベルリンのパレスティナ・オフィスは改訂派ベタールに対してはパレスティナ入国証明の配慮をしないよう指令を受けた。改訂派は、これに対しては、ドイツ・シオニスト連合の集会で騒ぎをおこし、「マルクス主義のやからよ、よく聞け！　おまえたちはすべて第二インターナショナルに属するヒスタドゥルートのシンパだ！」[1]と叫んで集会を妨害することで応えた。こうした事態の結果、ドイツ・シオニスト連合本部も一九三四年六月には一時、閉鎖されている。八月六日には、国家シオニスト指導者のひとり、フリードリヒ・シュテルン博士がナチスに書簡を送り、国家シオニストの反マルクス主義青年組織「国家青少年団ヘルツリア」は、ドイツ・シオニスト連合から送

られたいわゆる親マルクス主義組織ヒスタドゥルート支持者を擁するパレスティナ・オフィスによって、出国から排除されることで、その成育が妨げられていると、事態を説明した。さらにシュテルンは、パレスティナ・オフィスを国家シオニスト側へ移管させてほしいとナチスに訴えた。ドイツ・シオニスト連合は、ヘルツリアに放ったヘハルツのスパイを通じ、またナチ体制内部の独自のコンタクトを通じてこうした陰謀に気づいたため、改訂派のもくろみは失敗した。[2]もしパレスティナ・オフィスを国家シオニストにゆだねてしまえば、世界シオニスト機構はドイツで証明書をだそうとしなくなることをナチスは直ちに理解した。ナチスが世界シオニスト機構およびパレスティナへの出国を組織するユダヤ人救援組織を必要とするかぎり、ナチ協力者をユダヤ教信徒共同体におしつけるわけにはいかなかった。カーレスキの運動は、考えられなかったような立場にジャボティンスキーを追い込んだ。ジャボティンスキーは世界シオニスト機構によるハーヴァラを非難しながら、ドイツ国内の自らの運動のほうはナチスのために働いている、というとんでもない事態に陥らされたのである。そこで彼はただちに告知した。「以後、我がヘルツリアの見解を強要するシオニスト翼は〈マルクス主義者〉という言葉を論争においてけっして使ってはならないということも承知すべきである」[3]と。

ナチスは非シオニスト・ユダヤ人よりもシオニストを優遇する一般的な政策を決定した。またその方針の中で、ドイツ・シオニスト連合の「マルクス主義者」を抑圧するのではなく、むしろ国家シオニストをはっきり奨励することが、戦略にならなければならないということも決定した。一九三五年四月一三日、ゲシュタポは秩序警察（通常警察）に対して次のような通達をおこなっている。今後、

例外的かつその例外をいつ外されてもかまわない条件で、国家シオニストのメンバーは、「国家青少

年団ヘルツリア」に所属する自由、さらに「ブリト・ハショムリム」のメンバーが屋内で制服を着用できる自由を認められる許可を受けることができる。……国家シオニストは、非合法手段を含めてどんな手段を用いてもそのメンバーをパレスティナに送り、出国に向けての真剣な活動によって、ユダヤ人をドイツから排除したい政府の意図とも妥協の余地を見出す、そういう組織であることが判明したからである。制服着用許可によって、ドイツ・ユダヤ人諸組織メンバーの、国家シオニスト青少年団への参加が促されることが望ましい。この青少年団に入ればパレスティナに向けての出国がより効果的に進捗するからである。[4]

国家シオニストはゲシュタポと関係があったが、一九三五年のウィーンでの新シオニスト機構会議においてカーレスキは歓迎を受けた。改訂派が反ナチ・ボイコット支持を決めた時、ボイコットをまもろうとする目的から形式的には支部は除名されていた。カーレスキがこの会議に出席したのも、ボイコット反対のロビー活動をするようゲシュタポに促されてのことだったのは、明らかであった。不安になった改訂派支持者大衆は、国家シオニストから離れる態度をみせ、場合によっては、ドイツでの改訂派運動を解体し、存在できないようにすることもありうる、という決議を強いた。[5] カーレスキはクラクフで開かれたベタールの次の会議にも名うてのユダヤ人ゲシュタポを伴ってでかけるというまちがいをおかしたため、ドイツ・ベタールの中の幾人かが彼らのことをジャボティンスキーに報告に及んだ。[6] カーレスキは会議からの退去を求められ、ジャボティンスキーはやむなくカーレスキに対し、自分で公の場で弁明し、自らがナチスとは全然関係をもっていないと、はっきり述べるよう要求した。[7] しかしその後一九三六年に、ジャボティンスキーは、自分の本の一冊に版権をもっているドイツの出版社との交渉で、カーレスキを橋渡し役として用いている。ジャボティンスキーは、クラクフ会議以後、カーレスキについてはこれ以上自分の関知するところではないとしていたが、カーレスキがドイツにとどまっているかぎり、世界の改訂派内部の少数派、分けてもウィーンのヴァイスル・グループとは接触が続けられた。このグループはカーレスキの親ナチ路線に同意していたからである。

シオニストは「人種的ユダヤ人」として少なくとも我々に正規に保証をなした

ドイツ・ユダヤ人に自分のやり方を受け入れさせるのにカーレスキが繰り返し失敗したからといって、ナチスはカーレスキをユダヤ人社会におしつけようとするのをためらわなかった。一九三五年末、ナチスはカーレスキをユダヤ文化同盟全国連盟に接触させた。この文化同盟は、すでにその地位から逐われていたユダヤ人音楽家・作家・画家たちに職を提供するために設立された組織であったが、ゲシュタポは、真のシオニスト精神が同盟に幾分でもためになるものと決めこんでいた。[8] ドイツ・シオニスト連合のベンノ・コーエンは、同盟会長の指揮者クルト・ズィンガーの補佐役に任ぜられていたが、それだけでは足りないとされた。他の演奏家たちがなお実際文化的な同化主義者だったからである。一九三五年一〇月、芸術とは全く無縁のカーレスキが、ズィンガーの上司に任命され、コーエンは解任された。指揮者のズィンガーは、ナチスに対し、カーレスキと協働するよりは辞任したいと申し入れたが、ナチスはカーレスキを同盟に押しつけるのをやめず、結局同盟は閉鎖されてしまった。ナチの政策に同意するのを拒否したユダヤ人のこうした態度はナチの報道機関の注意を惹き、同盟の管轄権を有した文部官僚ハンス・ヒンケルは、新会長の選任に際して公式に以下のような声明を発した。

私は鋭意シオニズム運動に対し、文化同盟の文化・精神諸活動への最も強力な影響力を行使させんとこれつとめてきた。何となれば、シオニストは「人種的ユダヤ人」として少なくとも我々に協力を受け入れ可能なかたちで正規に保証したからである。[9]

ヒンケルがここで言及しているシオニストとは、もちろん国家シオニストのことであった。国家シオニストは一九三一年と比較してもこの当時さらに支持されなくなっていた。現実に即して見ても、組織の成員数は数十人の成人党員と五百の若者を超えなかった。[10] しかし、ナチスは宣伝上カーレスキを重視していた。ベルリン・ユダヤ教信徒共同体の元トップとして、また国家シオニストのリーダーとして、さらに今度は文化同盟会長として、きわめて印象的な人物と思われたからである。ゲッベルスの息のかかった宣伝紙『アングリフ（攻撃）』は、一二月二三日にカーレスキへのインタヴューをおこなっている。

私はこれまで長期にわたって、ドイツ人とユダヤ人のそれぞれの文化活動の完全な分離こそ、相互の平和的協力のための条件とみなしてきた。……もちろん異質な民族性の相互尊重にもとづいてのことであるが……。ニュルンベルク法は、……法規定そのものは別にして、かかる相互尊重にもとづく分離生活の望みに完全にマッチしているように私には思われる。ユダヤ人学校も私の友人たちの昔からの政治的要求を満たすものである。なぜならばユダヤ人の伝統と生活様式に即した教育は、全く理想的なものであると仲間は考えているからである。[11]

しかし文化同盟のほうも、文化的分離主義のモデルであったがゆえに、ナチスにとっても、カーレスキ

問題が理由となって廃棄してしまうにはあまりにも重要な存在であった。そこで最終的にはカーレスキぬきで文化同盟再編をナチスは認めたのであった。一九三七年にはカーレスキとゲシュタポはもうひとつの策略を準備した。今回標的になったのは、ドイツ・ユダヤ人全国代表部であった。カーレスキはベルリン信徒共同体内の保守的同化主義者の不満分子と同盟を組み、国家シオニストがこの全国組織の政治活動を引き継ぎ、共同体会衆が中心になって慈善機能を果たしていくべきであるという提案をおこなった。大ベルリン・ユダヤ共同体ラビのマクス・ヌスバウムは、改訂派路線のためのナチスの圧力について後に語っている。ゲシュタポのユダヤ人委員クーフマンは、近代ユダヤ人についての利用できるあらゆる関連書を読み、ユダヤ人問題に関するエキスパートになることを思いつき、自らの責任で義務を果たす決心をして、ヌスバウムに出頭を命じた。

クーフマンは、その熱中する性格から突如改訂派の考え方に染まり、ゲシュタポの彼のオフィスに運悪く出頭を命じられた我々の誰かに対してその都度、改訂主義こそがパレスティナ問題の唯一の解決だと断言し、公式のシオニズムのほうを「赤」で「左翼」だと非難してやまなかった。一九三七年春のある日、彼は私をオフィスに呼びつけ、私が改訂派集団の指導を引き継ぎ、改訂派の考え方をドイツ・ユダヤ人の間でよりポピュラーにする一方、「マイネッケ通りのシオニズム運動」（ドイツ・シオニスト連合）のための宣伝をやめるよう、素っ気なく命じた。……私がこれを断ると……彼は私の講演執筆を一年間禁止する「懲罰」を食らわしたのである。[12]

再び企図は挫折した。裏切り者が運営するドイツ・ユダヤ人中央組織は外国ユダヤ人に資金提供を強い

私は鋭意シオニズム運動に対し、文化同盟の文化・精神諸活動への最も強力な影響力を行使させんとこれつとめてきた。何となれば、シオニストは「人種的ユダヤ人」として少なくとも我々に協力を受け入れ可能なかたちで正規に保証したからである。[9]

ヒンケルがここで言及しているシオニストとは、もちろん国家シオニストのことであった。国家シオニストは一九三一年と比較してもこの当時さらに支持されなくなっていた。現実に即して見ても、組織の成員数は数十人の成人党員と五百の若者を超えなかった。[10] しかし、ナチスは宣伝上カーレスキを重視していた。ベルリン・ユダヤ教信徒共同体の元トップとして、また国家シオニストのリーダーとして、さらに今度は文化同盟会長として、きわめて印象的な人物と思われたからである。ゲッベルスの息のかかった宣伝紙『アングリフ（攻撃）』は、一二月二三日にカーレスキへのインタヴューをおこなっている。

私はこれまで長期にわたって、ドイツ人とユダヤ人のそれぞれの文化活動の完全な分離こそ、相互の平和的協力のための条件とみなしてきた。……もちろん異質な民族性の相互尊重にもとづいてのことであるが……。ニュルンベルク法は、……法規定そのものは別にして、かかる相互尊重にもとづく分離生活の望みに完全にマッチしているように私には思われる。ユダヤ人学校も私の友人たちの昔からの政治的要求を満たすものである。なぜならばユダヤ人の伝統と生活様式に即した教育は、全く理想的なものであると仲間は考えているからである。[11]

しかし文化同盟のほうも、文化的分離主義のモデルであったがゆえに、ナチスにとっても、カーレスキ

問題が理由となって廃棄してしまうにはあまりにも重要な存在であった。そこで最終的にはカーレスキぬきで文化同盟再編をナチスは認めたのであった。一九三七年にはカーレスキとゲシュタポはもうひとつの策略を準備した。今回標的になったのは、ドイツ・ユダヤ人全国代表部であった。カーレスキはベルリン信徒共同体内の保守的同化主義者の不満分子と同盟を組み、国家シオニストがこの全国組織の政治活動を引き継ぎ、共同体会衆が中心になって慈善機能を果たしていくべきであるという提案をおこなった。大ベルリン・ユダヤ共同体ラビのマクス・ヌスバウムは、改訂派路線のためのナチスの圧力について後に語っている。ゲシュタポのユダヤ人委員クーフマンは、近代ユダヤ人についての利用できるあらゆる関連書を読み、ユダヤ人問題に関するエキスパートになることを思いつき、自らの責任で義務を果たす決心をして、ヌスバウムに出頭を命じた。

クーフマンは、その熱中する性格から突如改訂派の考え方に染まり、ゲシュタポの彼のオフィスに運悪く出頭を命じられた我々の誰かに対してその都度、改訂主義こそがパレスティナ問題の唯一の解決だと断言し、公式のシオニズムのほうを「赤」で「左翼」だと非難してやまなかった。一九三七年春のある日、彼は私をオフィスに呼びつけ、私が改訂派集団の指導を引き継ぎ、改訂派の考え方をドイツ・ユダヤ人の間でよりポピュラーにする一方、「マイネッケ通りのシオニズム運動」（ドイツ・シオニスト連合）のための宣伝をやめるよう、素っ気なく命じた。……私がこれを断ると……彼は私の講演執筆を一年間禁止する「懲罰」を食らわしたのである。[12]

再び企図は挫折した。裏切り者が運営するドイツ・ユダヤ人中央組織は外国ユダヤ人に資金提供を強い

ることができなくなった。ナチスは方針を撤回した。残念賞というわけではないが、ナチスは一九三七年春に国家シオニスト機構をドイツの公的福祉機関と交渉権をもつ唯一のユダヤ人代表組織に指定した。[13]

ナチスにとってのカーレスキの利用価値は、一九三七年七月、カーレスキの経営するイヴリア銀行でスキャンダルが発覚し、ピリオドを打つことになった。組織役員や自分の個人的友人たちのためにカーレスキは違法な融資をおこない、ベルリン・ユダヤ教信徒共同体名義の手形を振り出し、本来連署を要するところを彼の署名だけで銀行員に引き受けさせていた。出納係は不本意ながら手形を引き受けたが、共同体の会衆に通報した。この違法行為からカーレスキ個人が利益を得ていた証拠は存在しない。カーレスキはユダヤ人共同体内部で味方を獲得するために融資を証票がわりに利用した。しかし結局銀行は破産し、彼はパレスティナへ赴くことになった。[14]

だがこの訪問もうまくいかなかった。一九三七年一〇月六日、ハイファのユダヤ人信徒共同体は、カーレスキがハイファに滞在しているのを見つけたため、大群衆が彼を迎えるべく街に出てきて彼を追い回しだした。カーレスキは最後には一軒の家に逃げ込んでバリケードを築き、警官によってようやく救出される事態となった。[15] ドイツ移入民協会（HOG）は、ナチスの助けをかりてドイツ・ユダヤ人の代表におさまろうと画策した容疑、ドイツ・シオニスト連合議長の殺害を煽動した容疑、シオニストの組織を破壊しようとした容疑、銀行での巨額不正融資等々で正式に告発した。カーレスキは自らの容疑を否認してラビ裁判所での審理を主張するという誤りをおかした。一九三八年六月、首席ラビを長とする裁判所は、協会の告発が証拠によって完全に実証されたと判決を下した。[16] この有罪判決が事実上カーレスキの盛んな政治的成功を終わらせたのだった。

パレスティナのユダヤ人を守るためのユダヤ人軍団

カーレスキについて自分は関知しないとジャボティンスキーは言っていたが、改訂派運動内部でカーレスキはつねに自分を弁護してくれる人間を見つけることができた。ジャボティンスキーの反ナチズムに同意しないグループがつねに存在したからである。ウクライナ軍部隊が三万人のユダヤ人を虐殺していた時に、ジャボティンスキーがスラヴィンスキー協定というかたちでシモン・ペトリューラとの取引につとめたことが許されてよいならば、ヒトラーとの取引がなぜ受け入れられないといえたであろう。水晶の夜以前は、ヒトラーもユダヤ人をユダヤ人として殺したわけではなかった。改訂派は、ヒトラーの勝利、政権掌握がファシズムの時代の到来を予示しており、ユダヤ人はただもうそのことを理解し、それと妥協しなければならないと確信していた。東欧の他の権威主義的独裁との交渉をとりもったフォン・ヴァイスルのグループはカーレスキのアプローチに賛同していた。一九三六年、フォン・ヴァイスルははっきり自分のイニシアティヴでイギリスのファシストとコンタクトをとり、イギリス・日本・ポーランド・ドイツに将来の改訂派国家を加えた、反ソ連、反アラブ・アジア植民地革命の空想的戦時同盟を提案している。[17]

ラビの裁判所の判決が最終的にカーレスキのキャリアを閉じさせ、そうして孤独のうちに憎まれながら彼は生涯を終えたとここで伝えられるならばよいのだが、一九四七年八月二日、六八歳のカーレスキはパレスティナ改訂派健康基金総裁におさまったというのが事実である。彼の友人の中にはラマート・ガンの或る通りにカーレスキの名前をつけようとさえした者もいる。[18] ドイツでヒトラーが権力を握るやいなや他の世界の人びとはユダヤ人を見捨てたということを我々も知っているのであるが、それだけに、可及的すみやかな出国が唯一の解決法だったと示唆する、カーレスキ弁護論者はその後もたくさん存在する。

極端なタイプであったが、古典的な改訂派であったカーレスキは、ドイツ・ユダヤ人社会を裏切った人間である。カーレスキのヴィジョンは、地中海からユーフラテスにまで広がり、ムッソリーニをユダヤ人に対する委任統治保護者とする改訂派国家という予言的なものにすぎなかった。[19] カーレスキはホロコーストを予見できなかった。一九三五年には、毎年二万人のユダヤ人をドイツから出国させる、今後二五年間の退去計画を提案していた。彼の関心は、ヘルツリア青少年団を「パレスティナのユダヤ人を攻撃から守るユダヤ人軍団」[20]として用いることにあった。

ナチスがカーレスキをドイツにおける協力者として利用したことは驚くべきことではない。同化主義者の中でもきわだった彼の敵、マクス・ナウマンは、第三帝国へのユダヤ人の完全な参加を唱えたために全く受け入れられなかった。カーレスキはまるで俳優派遣センターから送られたかのような適役としてナチスの前に現れた。役者ユダヤ人のカリカチュア、不正な高利貸し、不信心の人間からユダヤ人たちを隔離するのに熱心な中世的ラビ、褐色のシャツを着た出国者運動の頭目というのが、カーレスキの役どころであった。

第13章　選ばれた人を選別する――「シオニストの酷薄さ」の原則

ドイツからのユダヤ人の出国者の統計数字は典拠によって多少異なっているが、概数で見れば大体一致している。一例を挙げれば、ヘルベルト・シュトラウスは、トータルで二七万―三〇万人の出国者数をあげている。[1] このうち避難先と推定できる国々で死亡した者は三万人と見積もられている。イェフーダ・バウアーは一九三三～三八年、ドイツおよびオーストリアからパレスティナへの合法的出国者数を四万四五三七名としている。バウアーによれば、パレスティナへ移入したユダヤ人の「約二〇パーセント」を占めている、という。[2]『ユダヤ百科事典（エンサイクロピーディア・ジュダイカ）』は、一九三九年までにドイツ・オーストリアから五万五〇〇〇人がパレスティナへ赴いた、としている。[3] ファウツィ・アブ＝ディアブは、一九一九～一九四五年におけるドイツからのパレスティナ移入者として三万九一三一人しかあげていないが、彼の低めの挙示数は、英委任統治政府およびユダヤ機関から「公認旅客」「無国籍者」「詳細不明」というカテゴリーに入れられた人びと（この時期その多くがドイツ出身者）を除いた限定付きの者だからである。[4] パレスティナへの出国者数と対比しながら『ユダヤ百科事典』は、アメリカへの出国者数を六万三〇〇〇人、イギリスへの出国者数を三万人、フランスへの出国者数を三万人、ベルギーおよびアルゼンチンへの出国者数を各々二万五〇〇〇人と見積もっている。[5] 上海の国際租界に入ったユダヤ人については、

叢書・ウニベルシタス　705

ファシズム時代のシオニズム

レニ・ブレンナー著
芝　健介 訳